

ふりがな すぎばやし あつのり
氏 名 杉 林 篤 徳
学 位 博 士 (歯学)
学 位 記 番 号 新大院博 (歯) 第 109 号
学 位 授 与 の 日 付 平成 19 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当
博 士 論 文 名

歯の外傷およびマウスガードに関する保護者の意識調査

論文審査委員 主査 教授 野 田 忠
副査 教授 齋 藤 功
教授 小 野 和 宏

博士論文の要旨

【目的】

小児では、外傷に遭遇した際に周囲にいる保護者などの受傷への迅速な対応が重要となる。欧米では、保護者や養護教諭が歯の外傷に遭遇したときにどの程度の応急処置を行うことができるかどうかについての調査は多く行われているが本邦での報告はない。また、スポーツをする小児をもつ保護者に対して、歯の外傷の応急処置法やその予防法などの知識がどの程度浸透しているのかを調査した報告もない。そこで、本研究では、小児の保護者が、歯の完全脱臼と再植、ならびにマウスガードについての知識をどの程度もっているのかについて、さらには保護者に完全脱臼歯の応急処置方法やスポーツ外傷予防としてのカスタムメイドのマウスガードを認識してもらい、保護者の意識向上を図ることを目的として、歯の外傷とマウスガードに関するアンケートによる意識調査を行った。

【研究方法】

研究対象は、小児歯科診療室を定期診査で受診した小児の保護者(第 1 群;平成 14 年受診群 258 名、第 2 群;平成 16 年受診群 100 名)とサッカーチームに所属する保護者(第 3 群;86 名)とした。なお、第 1 群の調査終了後、診療室待合いに外傷に関連したパンフレットとマウスガードの実物展示と写真入りの数ページにわたる説明冊子を置いた。アンケートの質問項目は、歯の外傷についての一般的事項、完全脱臼歯の再植に関する事項、マウスガードに関する事項に分けて行い、再植とマウスガードに関する事項については、初めから順次回答することで、脱落歯の適切な応急処置方法やマウスガードの有用性について知識を得られるような質問内容にした。

【結果】

1. 歯の外傷既往については、第 1 群(37%)と第 2 群(47%)の間には違いを認めなかったが、第 3 群でやや少なく 30%であった。受傷時のアドバイスを受けた経験のある者は、第 1 群と第 3 群では非常に少なく 10%に満たなかった。一方、外傷の講習会等への参加

は、3群ともに70%前後の者が希望しており、群間での差は認めなかった。

2. 完全脱臼による脱落歯が再植可能であることを認識している者は、第1群と第3群では25%弱に過ぎず、2群でやや高値を示したものの半数以下であった。永久歯完全脱臼の場合の応急処置として、自ら脱落歯を歯槽窩に戻して再植を試みた方がよいことを認識している者はさらに少なく、第1群では5%、第3群で10%であり、やや多かった第2群でも13%に過ぎなかった。脱落歯の牛乳保存についての認識率はやや高く、第1群と第3群で20%前後、第2群では34%であった。

3. マウスガードの認識率は3群ともに70%以上と非常に高く、特に第2群では90%弱の者が認知していた。マウスガードを知っている者の中で、カスタムメイドタイプを知っていた者は、第1群で最も低く22%、次いで第3群で34%であり、第2群では65%と高率を示した。さらに、カスタムメイドの外傷予防効果の高いことについても、第1群で18%と少なく、次いで第3群の27%、そして第2群では47%と約半数が認識していた。実際にマウスガードを使わせてみたいかどうかでは、第1群では30%、第3群では36%であったが、第2群では約半数近くの者が希望するとの回答であった。

【考察】

第1群と第3群において、完全脱臼歯に関する質問項目では、すべての質問項目で認識率に群間の有意差を認めなかったことから、一般の保護者と小児がサッカーチームに所属する保護者の間で、完全脱臼歯に関する認識度の違いはほとんどないと考えられた。歯の再植、脱落歯の取り扱いや応急処置に関して、3群ともに認識率はきわめて低かったものの、第2群では、ほとんど全ての項目で、第1群に比べ有意に認識率が向上しており、2年間にわたって診療室に置いてあるパンフレットの効果があったものと推察された。マウスガードに関する質問事項では、3群ともに認識率は高い傾向にあり、第2群、第3群、第1群の順で高かった。第1群よりも第3群の方が認知率が高い傾向が認められたことから、一般の保護者よりもスポーツをする小児をもつ保護者の方が、歯の外傷予防への関心はやや高いのではないかと推察された。マウスガードに関しては、特に第2群では、他の2群に比べ有意に認識率が高く60%を越える項目もあった。これは、診療室待合いに、掲示物だけでなく、実物展示や写真入りの説明冊子を置いた視覚効果が高かったためではないかと考えられた。講習会へは、保護者の多くが参加を希望しており、歯の外傷への関心は高いことがうかがわれた。一方、実際に外傷のアドバイスを受けたことがある者はごく少数だったことから、歯科医の今まで以上に積極的な働きかけが大切であると考えられると同時に、受傷の可能性の高い小児の保護者へのマウスガードの外傷予防効果を強調したアプローチも必要であることが示唆された。

審査結果の要旨

歯の外傷は、屋内、屋外を問わず、家庭外だけでなく家庭内でも突発的に発生する。なかでも、完全脱臼歯に関しては、脱落后30分以内の再植が重要であることから自ら歯槽窩に戻してみるよう推奨されており、歯槽窩にうまく戻せない場合には、歯牙保存液や新鮮な牛乳に浸して、再植を行うまでの脱落歯の乾燥を避けなければならない。特に小児では、外傷に遭遇した際に周囲にいる保護者や養護教諭などの受傷への対応が重要となるが、彼らがどの程度正確な知識を有しているかについての研究は本邦ではなかった。また、日本でもサッカーを楽しむ小児が増えていることから、その保護者に対して、歯の外傷の応急処置法やその予防法などの知識がどの程度浸透しているのかを調査する必要性があった。そうした背景のもと、本研究では小児歯科診療室を訪れた保護者

とサッカースクールに所属する小児の保護者に対して、歯の完全脱臼と再植、ならびにマウスガードについての知識がどの程度あるのかについてアンケートによる意識調査を行っている。

調査対象は、研究の趣旨に同意の得られた小児歯科診療室を定期診査で受診した小児の保護者(第1群;平成14年受診群258名、第2群;平成16年受診群100名)とサッカーチームに所属する保護者(第3群;86名)である。第1群と第3群において、完全脱臼歯に関する質問項目では、すべての質問項目で認識率に群間の有意差を認めず、一般の保護者と、小児がサッカーチームに所属する保護者の間で、完全脱臼歯に関する認識度の違いはほとんどないことを示唆している。一方、マウスガードに関する質問事項では、第1群よりも第3群の方が認知率が高い傾向が認められたことから、一般の保護者よりもスポーツをする小児をもつ保護者の方が、歯の外傷予防への関心はやや高いのではないかと推察している。

また、歯の再植、脱落歯の取り扱いや応急処置に関して、第2群では、ほとんど全ての項目で第1群に比べ有意に認識率が向上したと同時に、マウスガードに関しても、第2群では、他の2群に比べ有意に認識率が高くなったことから、2年間にわたって診療室待合いに、掲示物だけでなく、実物展示や写真入りの説明冊子を置いた視覚効果が認識率向上に効果的であることを提示している。さらに、講習会へは、保護者の多くが参加を希望しており、歯の外傷への関心は高いことがうかがわれたことから、歯科医の今まで以上に積極的な働きかけがあれば外傷歯の応急処置法の認識率は飛躍的に向上する可能性を示すと同時に、受傷の可能性の高い小児の保護者へのマウスガードの外傷予防効果を強調したアプローチも必要であることを本研究では示唆している。

本研究は、本邦で初めて外傷歯の応急処置法やスポーツ外傷の予防法に関する保護者の意識調査を行い認識率を明らかにした点、ならびにこうしたアンケート調査や各種掲示物や説明冊子が認識率向上の一助となることを明確にした点で、保護者に対する今後の歯科外傷の啓蒙活動に大いなる貢献を果たすものと考えられることから、学位論文としての価値を認める。